

〔駐村研究員だより〕

豊かさを共に学ぼう！

平野正俊

農業、農村の持つ教育的な機能を積極的に評価し、青少年の教育の場として活用しようとする動きが生まれ、学校農園の設置、農家農村での農業体験、農業施設・産地見学、都市と農村の交流活動が取り組まれている。私も幼稚園や小・中・高等学校での農業体験学習を推進するための生徒、教員やPTA向け研修などの講師に引っぱり出される機会が増えた。

農業体験学習の意義としては、自然の営みや自然と人間とのかかわりを知り、労働の大切さを学び、職業として農業を理解し、農業の役割と機能を学ぶことができることが挙げられる。

コンクリートジャングルでの生活、遊びといえばテレビゲーム、塾通いの強要——などと、土から離れてしまった現代っ子。農業や自然は見る、聞くの範ちゅうに追いやられ、土の色やにおいにはぐくまれて、自然の中の動物や昆虫、植物たちと触れ合うといった、本物の出会いは、すっかり遠ざけられてしまった。その結果、触る、かぐ、取る、食べるなどのいわゆる“五感”を体験する機会がほとんど失われてしまっている。

五感の体験は、忍耐力や判断力、思考力、想像力を養い、人間として生きる力を育てるといっても過言ではない。農業の仕組みと四季感、生命感を知り、あるいは農業や自然にはつきものの未知との遭遇などを通して、子供たちは感動を覚え、変化し、成長していくものである。感動の体験は、自己活性化の源ともいえる。

昨年10月、静岡県立沼津盲学校小学部の修学旅行の団が農園にやってきた。1泊2

日のファームステイ体験学習。入園式、農園散策や冒険の森探検での沢ガニ捕りやターザン遊びは私たちでもスリル満点。夕飯をみんなで作り、大きな声で「いただきます」。農家住宅の1階を寝床に提供。先生・生徒・私たち家族もゴロ寝、朝の集いに大きな歌声。自分の手を精一杯のばして、キウイの収穫作業。踏みしめる大地に土の香り、ザラザラ、ツルツル樹木に風の音。自然を抱きしめながら一体になっていく。生きているんだ、幸せだなという気持は何にも代えがたい体験である。別れの時、先生はこの修学旅行の価値を次のように評価した。——例年の修学旅行は大都市に出掛けている。たとえば東京では物凄い人波と交通量のため何時しか指示は注意ばかりになり、小学生生活の最大の楽しみに喜び満ちあふれた顔もしょんぼり元気をなくしてしまう。大都市への旅行に疑問を感じてきていたが、農業体験は子供たちに、もっとチャレンジする魅力と未来への可能性を学んだ。そして、このような機会を提案する私もこそ学び、成長、活性化することができ——。

しかしながら、子供たちに農作業体験を押し付けるつもりはない。絵をかかせたら、鶏の足が4本だったり、牛や馬が猫や犬に似ていたりするのは、恐ろしいことではあるが、子供たちの責任ではないし、本物に接しにくい環境・条件に置かれているからであろう。

また、「体験学習農園を育てる会」の目的は、自然や農業の体験を通じて、心豊かな人間を育成すること。自然・農業環境が圧迫、狭められている中で自然の雄大さや農業の大切さ、そして生命の営みを訴え、人と人、人と自然、人と農業の出会いを提案する体験学習農園を応援し、育てていきたいと始めた。

第一段階として4年前に、自然や農業とゆっくり向かい合って観察や交流が図れるよう、野草を楽しむ会と写生大会をスタートさせた。写生大会は、昨年「自然と農業の

芸術祭」のキャッチフレーズで拡充し、写生大会と創作大会にし、さらに遠方の人応募も認めることにした。これをきっかけに県内、全国にネットワークを構築し、本年から対象を海外にも広げて国際的な「自然と農業の芸術祭」としていきたいと企画、現在推進中。

あらためて強調するまでもなく農業を取り巻く環境は厳しく、指導者サイドから明るい

声がしてこないことはしばしばである。けれども私たちは「伝えよう！自然の雄大さ、農業の大切さ、本物の味。」「共に学ぼう！人生の豊かさを。」を行動の基本とし、農業者自身が最大限の努力を重ね、生き方を示すとの自覚のもとに活動していくつもりである。

(静岡県掛川市・農業)